

巻頭言

海外留学再開への期待

名古屋大学 国際教育交流センター長

長 畑 明 利

1.

新型コロナウイルスは当初武漢を中心とする中国で蔓延し、その後、イタリアやスペインなどのヨーロッパ諸国で、また、アメリカ合衆国や中南米などでひろがり、ついには全世界に蔓延するパンデミックとなった。日本でも、1月に最初の感染者が発見された後、徐々に感染がひろがり、3月はじめには全国の小中高等学校等に休校要請がなされ、その後、感染者が大きく増大すると、4月はじめには7都道府県に対して緊急事態宣言が出された（5月後半に解除）。この間、ウイルスを原因とする著名人の死も報じられ、警戒感が高まった。ウイルスの影響は当然のことながら大学にも及んだ。多くの大学で卒業式や入学式などの行事が中止となり、新学期には、対面授業の代わりに通信機器を利用した遠隔授業が行われた。名古屋大学でも、新型コロナウイルスの流行に関わる大学の「活動指針」が策定され、全体的な「警戒カテゴリー」と、教育、研究、会議などの範疇ごとの「具体的な活動指針」が定められた。教育に関しては、他の多くの大学同様、実験など一部の例外をのぞいて遠隔授業が実施された。

新型コロナウイルスの影響が及んだのは授業のみではない。留学・国際交流にはとりわけ深刻な影響が及んだ。感染者が急増した国々では国境が封鎖され、それらの国に留学中の日本人学生たちは帰国を余儀なくされた。また、国によって、あるいは、帰国の時期によって異なるが、多くの学生が帰国後2週間、ホテル等での隔離生活を強いられた。一方、日本への留学生にも大きな影響が出た。大学に合格したにもかかわらず、入国ができない学生や、本国へ一時帰国した後再入国ができなくなった留学生もいる。また、入国もしくは再入国できないために、日本での留学生生活を断念する留学生も少なからずいる。

ウイルスは国境をたやすく越え、グローバルな人の移動は止まった。国境の内側で、人々はソーシャル・

ディスタンスを求められ、外出を控えて家にこもることを余儀なくされた。個々に孤立状態にありながら、しかし、人々は直接人に会うことなく、オンラインで人とつながることを試みた。教育現場ではオンライン授業が行われ、職場ではテレワークが行われた。学会が、音楽や芝居のパフォーマンスが、飲み会をはじめとする様々な社会的活動がオンラインで行われるようになった。オンライン・スナックの営業、オンラインで映像をつないだ筋トレなども行われているという。

2.

人々が集まって、直接話をするのが忌避される中、ヴァーチャルでの社会活動を次善の策として模索するのは自然なことだろう。教育に関して言えば、ウイルスへの感染のリスクを下げつつ、なおかつ教育活動を止めないための方策として、オンライン授業を導入することは有効な代替手段であるに違いない。それでは、コロナウイルス禍において、留学・国際交流もオンラインによる代替が可能だろうか？ 感染は終息しておらず、それゆえ、国境を越えての移動が困難な中、従来の意味での留学は難しい。そのような場合に、海外の大学所在地へ赴くことなく、オンラインで当該大学の講義を受講したり、演習に参加したりすることは、留学の代替となるだろうか？ もし留学というものが、海外の大学まで実際に行くことを必要とするものであるのなら、海外大学が提供するオンラインによる教育プログラムに参加することは、留学の範疇をはずれるものとなるだろう。しかし、もしオンラインによる学習に参加することで、これまで留学に期待されてきた目的が達成されるのであれば、それは次善の策として大いに意味あるものとなるだろう。それどころか、新型コロナウイルスのパンデミック状態にない平時であっても、同様の経験で事足りるという考えすら生まれるかもしれない。

しかし、海外留学を海外大学のオンラインによる教育プログラムへの参加に置き換えた場合に失われるものは当然ある。留学はこれまで、大学の講義を受けること以外に、海外の大学所在地もしくはその近郊に滞在し、そこで生活することを伴うものだった。そもそも、現地へ行くまでにも、様々な経験が必要であった。入学までの手続きでは外国語（たとえば英語）の書類を読んだり、作成したりする必要があるし、いざ渡航となると、空港での出国手続きがあり、その後には、まさに日本語や日本の常識が通用しない場所へ出ることになる。現地の空港に着陸すると、自分が生活する場所まで移動し、そこで生活の基盤を整えなければならない。寮やアパートに入る手続きをしたり、銀行口座を開いたりしなければならない。生活必需品も購入しなければならない。多くの場合、それぞれの場面で何らかの助言者がいるものだが、それでも助言者がすべて面倒をみってくれるわけではない。大学で講義に参加するためにも、様々な手続きを行わなければならない。授業に出れば、日本語の通じない環境で、日本語を話さぬクラスメートに囲まれ、あるいは、教員と直接向かい合って、母語を異にする他者との会話に参加しなければならない。講義・演習が終われば、教員やクラスメート以外の人たちとのやりとりも経験するだろう。食事や買い物を含む生活の様々な場面において、他者との小さなトラブルに対処することも必要になるかもしれない。

こうした経験は海外留学に参加する者にとっては、乗り越えるべきハードルであるに違いない。しかし、それを経験することにより、現地の様子、とりわけ、そこで生活する人々の様子を直接知ることができる。もちろん言語スキルの向上にも資するであろうし、友人もできるだろう。慣れぬ環境で生きていくためのサバイバル能力を高めることもできるかもしれない。実際に海外へ行き、そこで現地の教員や他の学生と接したり、大学関係者以外の人たちと交流あるいは接触することには、それらの人々との生身のやりとりを経験するという意義があるというわけである。

3.

海外の大学の講義をオンラインで受講することは、その大学の教員から講義内容の提供を受け、指導を受けるという点に限れば、現地に赴いて対面にて講義・指導を受けることの代替となりうるだろう。しかし、

その代替策には、上に挙げたような経験が伴わない。また、講義に際しても、オンラインの場合は、日本の自宅にしながら講義に参加できる。日本語が通じない世界は画面上のみ（あるいは、画面の向こう側のみ）であり、画面のこちら側、すなわち、自分がいまいる空間は日本語が氾濫する空間にはかならない。オンライン講義の最中に、自分の意志でビデオをオフにしたり、端末をネットワークから遮断したり、端末のスイッチを切ることで、日本語が通じない世界をたやすく視界から消すことができる。このことは、現地に赴く留学が必然的にもたらす心理的不安を取り除く効果を生むだろうが、そうした状況に慣れ、現地で不安を克服することも、海外留学の目的の一部であるだろう。

つまり、海外に身を置く留学と、移動せず、オンラインで現地の大学に繋がって講義を受けることの主たる違いは、しばしば困難を伴う経験を直接持つか、それとも、その経験から様々な形で距離を取り、自身を安全な場所に置くかの違いであると思われる。語学のスキルを向上させたり、学問分野の内容を吸収するという点だけであれば、そのような保護的な空間に身を置きつつそれを達成することも可能だろうが、海外留学には人、場所、ものに関する多岐にわたる直接的な経験を得られるという特徴があり、この点を無視することはできないのではあるまいか。

この直接的経験の有無の問題は、おそらく何らかの形で、外国語に対する姿勢にも通じるものであろう。昨今の通訳・翻訳ソフトの発達はめざましく、母語で書いたレポートを翻訳ソフトで翻訳し、それを自身の外国語のレポートとして提出するとか、外国語で書かれた論文等を和訳する課題のために翻訳ソフトを利用するということは、すでに現実に行われているのではなかろうか。近い将来、通訳アプリの利用も教育現場に入ってくるかもしれない。実際、英語をはじめとする外国語で講師が話すビデオを日本語字幕で視聴することは可能だし、映画がそうであるのと同様に、講義ビデオの吹き替え版が登場しても驚くことではない。今後、たいていのことがらは母語で解決するようになり、母語が通用しない文書や発話は通訳や通訳を介して間接的に受容するということが了解されていくのかもしれない。現地に行くことなく、自宅にしながらにして海外の大学の講義を受講し、さらにその講義を日本語字幕もしくは日本語への吹き替えで受講する

ことができるようになれば、それは地理的な距離を克服し、さらに、言葉の壁を克服した、究極的なグローバル教育の姿になるという見方もできるのかもしれない。そこではもはや海外の人が自分の母語とは異なる言語を用いており、異なる生活習慣のもとに暮らしているという事実は大きな問題ではなくなり、教育内容が言語の違い、場所の違いを超えて共有される。それに伴い、もはや現地に赴くという意味での留学という概念は時代遅れのものになり、また、時が経てば、外国語を用いることすら時代遅れのものになるかもしれない。

こうしたSFじみた世界がすぐに到来するかどうかはわからないが、仮にこのような形での「グローバル化」が実現していく場合、上述したような他者との直接的経験は消失することになるだろうが、そのことは少なからず憂慮すべきことではなかろうか。母語のみが通

用する世界に生き、外国語が用いられ、外国人が住む世界との接触が、情報機器や翻訳・通訳技術を介して間接的に行われるようになることは、母語が構築する世界とそれ以外の言語が構築する世界とが等価であるという幻想を生むことにつながりはしないだろうか。教育現場において、そうした異質な世界を遮断し、まさに相互に置換可能なことらのみを吸収していくことには危うさを感じる。

もちろん、新型コロナウイルス感染の危険が続く間は、海外留学に出かけることは困難であり、その代替として、オンライン技術を利用したヴァーチャルな方法で海外の大学と関係を持つことは自然なことだが、現地に赴く留学の意義も忘れないようにしたい。いずれにしても、一刻も早くパンデミックが終息し、現地へ赴く海外留学が可能になる日が訪れてほしいものである。